

「想起する文化」が求める行動規範と外交戦略の間で

梶村道子(ベルリン・女の会)

「認可しておいて、設置早々取り消すとは」。除幕式からわずか10日後に、ベルリン市ミッテ区市街地に設置された「平和の碑」に認可撤回と撤去命令が出たことを受けた関係者の第一声でした。「平和の碑」は、コリア協会が地元の市民グループ「レ・ユニオン」の協力を得て、区の「都市空間の芸術」審査委員会に設置を申請、区から1年間の認可を受け、9月28日に設置したばかりでした。

認可取消し直後、地元紙が「州当局は日本大使館およびミッテ区と話し、迅速な解決を図った」との発言をベルリン州政府広報から引き出すと、



除幕式で挨拶するラーベンスブリュック女性強制収容所記念館のインザ・エツェバツハ前館長 (撮影: 筆者)

社会民主党、緑の党、左派党のミッテ区支部は、相次いで認可取消し撤回と像の設置継続を求める声明を出しました。興味深いのは、各党がその根拠をドイツの現代史に求めていることです。緑の党は、認可取消しは、戦争犯罪ことに第二次世界大戦時中の性暴力

被害者を記憶し続ける人たちに、その当時ナチスのテロと戦争の発祥地だったベルリンから誤ったサインを送ることだと批判し、左派党は区議会に上程した議案で、ベルリンの歴史とその歴史の上にミッテ区やベルリン市とそこで営まれる市民社会が築かれたことを思えば、東アジアの歴史に批判的に取り組む像は公共の場所に置かれていいものだ、と述べています。後述の決議案を提起した海賊党も「二度と再び戦争はしまい」という哲学と想起する文化との関わりにおいて像の寄与は貴重だと言います。区長は、像が「もっぱら第二次大戦における日本軍の行為をテーマにしている」ことを認可撤回声明で問題にしました。区の進歩的諸政党にとっては、「第二次大戦における日本軍の行為」はベルリンの歴史と無縁でないがゆえに重要です。その上で彼らは、女性に対する戦時と日常の性暴力に関する議論を喚起するとの普遍的な視点から、像を支持しています。

一方、日本政府の圧力を受けたドイツ外務省は、以下の見解をベルリン州政府に伝えています。「ドイツと価値観を共有する国々が、歴史的問題を抱えているにもかかわらず国家間の関係を損なわないことは、東アジアの安全とドイツにとって重大な意味を持つ」(10月12日付同州儀典・国際関係局長のミッテ区長宛書簡)。それはグローバルな通商・安全保障政策という戦略的関心から、日本をその共有相手と見る価値観だと、知日家のジャーナリスト、ヴィーラント・ワグナーさんは指摘します。しかし独外務省とベルリン市の圧力の下で区長と区参事会が下した判断は、地元の

眼には「外交・経済上の利害を党是の価値観の上に置き、過去との取り組みという自ら掲げる行動規範に矛盾する」ものです(緑の党区支部抗議声明。区長は同党所属)。

11月5日の区議会で、認可期間中は像を残すよう求める決議案が採択されました。しかしこの決議に拘束力はなく、最終判断は区に委ねられます。設置者が裁判所に出した差し止め請求を受けて区はこの間に対話姿勢に転じましたが、対話の着地点は目下見通せません。

さて政治の舞台から離れたところで、像はどう受けとめ

られたでしょうか。除幕式では、区の文化担当課長が、戦時や日常の性暴力への警鐘を区から発信できて嬉しいと挨拶し、市民グループ「レ・ユニオン」も、性暴力の問題を住区内で啓発する契機だと歓迎しました。ラーベンスブリュック女性強制収容所記念館のインザ・エツェバツハ前館長

は、同収容所の女性がナチスに性労働を強いられ、ドイツ国防軍が侵略地で性暴力を振るった史実を引いて、像をドイツ現代史の文脈の中に据え、こうした視覚に訴える造形物がもっと建つといいと言葉を結びました。同記念館には来春、強制売春の被害者を想起する作品がベルリンのアーティストの手で設けられるそうです。

以下は除幕式の翌日像を見に行った知人の話です。学校帰りの小学生に、「この像がどういう意味か君たちにわかるかい」と初老の男性が説明しています。知人が尋ねると、ドイツ植民地の歴史に関する書物を図書館で読んでいるからこの像の意味もすぐに理解できたと、この人は語ったそうです。ドイツの植民地におけるジェノサイドや植民地に因んだ通り

や駅名の変更に関する議論が、最近当地でも持ち上がっています。この男性にとっても、東アジアから来た像は自国の未解決の歴史と無縁ではないのです。



像は近隣の人々に受け入れられている。碑文には「第二次世界大戦中、日本軍がアジア太平洋全域の機多の女性たちを性奴隷にした。平和の像は、その「慰安婦」たちの苦難を想起し、沈黙を破り、そうした犯罪が世界で繰り返されないよう力を尽くすサバイバーの勇気を讃えている」と書かれている(撮影: 梶村太郎)